



北方民族博物館だより

No.66



馬乳酒用木製容器〈チョロン〉

サハ（ヤクート） H9.26

サハ共和国／ブラマ 1996年収集

w.20.1xh.33.9cm

サハ（ヤクート）語でチョロンとよばれるこの容器は、白樺を材料に作られている。サハの伝統的な生業としては、馬飼育が知られており、馬の乳から馬乳酒（クワス）をつくる。チョロンは馬乳酒をいれるための容器である。外側一面に彫刻が施されており、本資料は100年以上前のものと伝えられている。

- 1 表紙 馬乳酒用木製容器〈チョロン〉
- 2 第22回特別展 環北太平洋の文化Ⅱ：ベーリング海に暮らす人びと
- 5 調査報告
- 6 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第22回特別展 環北太平洋の文化Ⅱ

『世界で一番ダイナミックな海 ベーリング海に生きる人びと 舞台は極北のベーリング海 自然も文化も歴史もひとめぐり チュクチもエスキモーもアリュートも 日本人も大活躍』

2007. 7. 14 - 10. 8

北海道からサハリン、カムチャツカ、アリューシャン列島、アラスカ、カナダそしてカリフォルニア北部に至る環北太平洋沿岸地域は、生物資源や自然環境の共通性から、文化的な類似性や共通性が指摘されてきました。当館ではこうした環北太平洋沿岸の先住民文化に注目し、四カ年にわたって特別展として取り上げることとしました。

今回はその第二回目として、古くから人や物がダイナミックにゆきかったベーリング海周辺に焦点をあて、自然や歴史、暮らしてきた諸民族の文化を5つのコーナーで紹介しました。

展示室はベーリング海の霧をイメージして全体を寒冷紗という布で覆い、観覧者は寒冷紗にあけた小窓をのぞき込むようにして資料を見るという展示手法をとりました。



テープカットの様子

I. ベーリング海的环境と歴史

今回の特別展のテーマとなる「ベーリング海」は太平洋の北に位置し、カムチャツカ半島からチュコト半島にかけて、そしてベーリング海峡を挟んでアラスカ半島、さらにアリューシャン列島に囲まれた海です。

この海は荒れる海であり、潮の流れが速く、霧が多く発生し、干満の差がはげしいことで知られています。大陸棚が発達しているため海産資源も豊富です。ユーラシア大陸

とアメリカ大陸とが最も接近した場所であり、現在の最短距離は90kmもありません。

歴史的な最大の関心事は、ユーラシア大陸からアメリカ大陸へと人類が渡った経路の一つにあたるということではないでしょうか。当時は約100mは海水面が下がっていたと考えられ、現在の海峡部を中心として、陸地化した部分は大きかったと推測されています。凍った海を渡ることも可能だったでしょう。

18世紀以降はヨーロッパ人がこの地に進出し、先住の人びとの暮らしは激変することになります。ベーリング海の豊富な資源のなかでも、特に「毛皮」がヨーロッパ人の目的でした。

II. ベーリング海に暮らす

ベーリング海域に長く暮らしてきた先住の人びとの文化は、自然・地理的環境、歴史とも密接な関係をもちながら育まれてきました。この地域に現在暮らす先住民名としては、コリヤーク、イテリメン、チュクチ、エスキモー、アリュートなどが挙げられます。また、現在は残っていない民族が存在した可能性もあります。

チュクチはチュコト半島を中心に暮らす民族です。トナカイを飼育するグループと、海に依存してきたグループのふたつが知られています。

エスキモー（イヌイト）全体は大きく西エスキモーと東エスキモーに二分されます。言語の例などから、エスキモーの故地は西側にあつて、それから東へとわりあいと短時間に生活領域を広げていったと考えられています。なお呼称ですが、非常におおまかにいえば、カナダはイヌイト、それ以外はエスキモーとされることが多く、さらにエスキモーは使用言語によって、ユピクとされたり、(かつての)居住地域により、アジア・エスキモー、ベーリング・エスキモーとされ、さらに-miut（ミウト）という自称を用いて呼ばれたりしています。

アリュートはエスキモーとの間に類似点が多く、かつては一つの集団であったと考えられています。アリュートについて忘れてはならないのは、カヤック「バイダルカ」のことです。木製の枠に、海獣皮を全面に張った小船は非常に精緻に作られています。決して穏やかではないベーリング海に、バイダルカの柔構造とそれを乗りこなす技術は必



需でしたが、毛皮商人たちに注目されることともなり、アリュートは毛皮猟に使役されることとなりました。

III.文化の回廊としてのベーリング海

海や酷寒の地への適応は、いずれの民族も高度に発達させていました。季節に応じての居住地の移動も適応の一例です。

またこの地域の文化的特徴として、例えば音楽の場合、太鼓（ドラム）以外に目立った楽器がないということが共通しています。この太鼓は、細かくみると地域によって取っ手の付き方に違いがあり、さらに膜を叩くか、杵を叩くかというような演奏方法の違いもありました。「喉鳴らし」と呼ばれる二人が向かいあつての歌唱法や、「座り踊り」にも共通性はみられます。「座り踊り」は大型の皮船を漕ぐ様子からうまれたチュクチの踊りであり、これがエスキモーにも伝わったということも指摘されています。

このほか海岸に生える草を材料としたバスケットづくりや、動物の牙や歯への彫刻の技術も共通しています。

言語では、交流の結果としての借用語がみられます。またこの地域の言語に共通する特徴として、文字をもたなかったことがあげられます。文字をもたなかったことと口承文芸の発達には何らかの関係があったかもしれません。アジア側からグリーンランドまで、「ワタリガラス・サークル」と呼ばれる、創造神話や民話に「ワタリガラス」が登場する現象がありました。一見広大な北方圏に、孤立して暮らしてきたような印象を与える人びとの、交流をうかがわせる事柄です。さまざまな物品と同じように、お話も運ばれていったのでしょうか。

このコーナーで、特に関西方面からの観覧者の注目を集めたのが「ビリケン」でした。日本では通天閣に祀られていることで有名なビリケンは、アラスカやチュコト半島、カムチャツカ半島にも存在します。



チュクチのビリケン
(高野孝子氏蔵)

IV.ベーリング海と日本

ベーリング海の、特にカムチャツカ半島沿岸では、明治30年代以降日本人によるサケ漁が盛んになりました。カムチャツカ半島では日本人が建てたサケ加工場が操業し、大勢の日本人がこの地へ赴いていました。初期には塩蔵の、その後缶詰に加工されたサケが日本や、イギリスを中心とするヨーロッパまで運ばれていました。

また、ある年齢以上の方は、ベーリング海という言葉から、太平洋戦争を連想されるかもしれません。アリューシャン列島は、日本軍とアメリカ軍が激しい戦闘を行った場です。アリューシャン列島のアッツ島に暮らしていたアリ

ュートは、1942(昭和17)年に小樽市に移送されています。おそらく軍事的な目的であったのでしょう。アメリカ軍も同様に、他のアリュートをアリューシヤンの島々から南アラスカなどに移住させています。

戦後ベーリング海は、ソ連とアメリカが対峙する最前線となりました。国境線が引かれたビッグ・ダイオミード島(ソ連/ロシア)とリトル・ダイオミード島(アメリカ)の間は4kmもありますが、大国間の緊張は当然先住民をはじめ、周辺国家へも影響を及ぼすことになりました。

V.ベーリング海に親しもう

ゲームや住居模型、復元バイダルカの試乗体験などベーリング海に親しんでいただくコーナーを設けました。

本展示は日本財団の助成を受け、多くの機関、個人から協力をいただき開催することができました。記して感謝申し上げます。

【助成】 日本財団

【協力】 市立函館博物館、函館市北方民族資料館、明治大学政治経済学部、高野孝子氏、津曲敏郎氏、岡田淳子氏、永井佳代氏、中谷敏邦氏、洲澤育範氏、洲澤美子氏、北海道民族学会、カラータ株式会社



バイダルカ試乗体験

また、特別展に関連した事業を多数行いました。

◆講座 「バイダルカ復元」 7月14日[土]

講師 洲澤育範氏 (カヤック職人)

カヤック職人である山口県在住の洲澤育範氏から、バイダルカの機能や復元のみならず、バイダルカにひそむ哲学を語っていただきました。

◆講座 「環北太平洋ことばの旅」 7月14日[土]

講師 津曲敏郎氏 (北海道大学教授)、
永井佳代氏 (東京外国語大学研究員)

共通点の多いベーリング海周辺の文化ですが、一方でこの地域には数多くの異なる言語が存在していることが知られています。津曲氏はこれらの言語の特徴や、そうした言語が大言語のなかで、使われなくなってゆく状況にあることなどを説明されました。永井氏は、特にエスキモー語の

中のユピック語について言語とセントローレンス島の様子を紹介されました。

- ◆公開研究会 「北方諸民族の言語」 7月15日[日]
報告者 風間伸次郎氏（東京外国語大学准教授）、
笹間史子氏（大阪学院大学准教授）、
永山ゆかり氏
（北海道大学スラブ研究センターCOE共同研究員）
コメンテーター 津曲敏郎氏、永井佳代氏
北方言語研究の第一線で活躍している研究者三名が研究成果を報告しました。

- ◆「海洋生態学者のみるベーリング海：
ベーリング海やオホーツク海でタラがとれる理由」
7月21日[土]
報告者 中谷敏邦氏（北海道大学水産学部 准教授）
ベーリング海は光合成が盛んに行われる条件が備わっており、そのために資源が豊かであることや、近年の温暖化の影響にどのような対策をとるかが、スケトウダラなどの海洋資源に影響してくることを、スライドを交えながら説明されました。



中谷 敏邦氏

- ◆展示解説会 7月22日[日]
笹倉がご案内しました。
- ◆学芸員講座② 「谷本館長の北方民族音楽鑑賞サロン」
7月28日[土]
講師 谷本一之（当館館長）
ベーリング海域に暮らす諸民族の音楽について、特徴や共通性をビデオを鑑賞しながら紹介しました。
- ◆講習会「フェルトで作るふわふわアザラシ」
8月3日[金]
講師 中山みどり氏（フェルト造形作家）
羊毛を特別な針を用いてフェルト化し、アザラシを作りました。



中山みどり氏（左）

- ◆学芸員講座③ 「ベーリング海と日本人：
北洋漁業と先住民と日本人の意外な関係をひもとく」
8月25日[土]
講師 渡部裕（当館学芸主幹）
ベーリング海と日本人の知られざる関係に焦点をあて、戦前の北洋での日本人の活躍を中心に紹介しました。
- ◆講座「先生のための環境教育講座」 9月7日[金]
講師 高野孝子（NPO法人エコプラス代表理事）
環境教育とはほんとうのところ何なのかということを出発点に、これからの時代を生きてゆく子どもたちに、環境と調和のとれた社会を実現するための「環境教育」をどのように展開していったらよいか、グループ討論を交えながら考えました。
- ◆講演会「ベーリング海を渡って見えたこと」9月8日[土]
講師 高野孝子氏
ベーリング海峡を徒歩でわたるなど、ベーリング海周辺での活動経験をもつ講師が、ベーリング海周辺に暮らす民族の文化や取り巻く自然環境を紹介しました。あわせて北極海横断時のビデオ上映を行いました。
単に冒険を行うだけではなく、自分の体験を、子どもたちに伝えるという環境教育活動の内容や、極地方に環境汚染が広がっている現状に、参加者から多くの質問が寄せられていました。



高野 孝子氏

（学芸グループ 笹倉いる美）

調査報告

『北欧 フィンランド・ノルウェー 現地調査』

2007.6.1 - 6.14

北欧に住むサミの文化とその現状に関する情報収集のため、当館の谷本館長に同行し、フィンランド、ノルウェーの一部を視察してきました。

フィンランドの首都ヘルシンキから国内線と車を使い、まず北部のイナリという町を訪れました。

イナリでは、最初にサミ博物館を訪ねました。サミ博物館は、1959年に野外施設として活動を開始し、その後1998年に現在の建物の完成に伴って改装オープンしました。サミの物質文化の収集・展示施設であると同時に、サミ文化に関する情報センターの役割も果たしています。

次に同じイナリにあるサミ文化に関連した施設を訪問しました。

サミ議会は、1995年の法令に基づき、サミの言語や文化に関する自治計画を立案・実行するために作られた組織です。イナリには事務局本部があり、その他3ヶ所に支部があります。

サミ教育専門学校は、さまざまな職業教育を受けることができる学校で、イナリのほか2ヶ所に設置されています。イナリには管理センターが置かれ、工芸・デザイン、サミの言語・伝統・文化に関する教育、高度な実践的研究などがおこなわれています。

サミ手工芸協会は、サミの手工芸文化を保護し、育成するために設立された団体です。イナリの直売所では、伝統的な衣類や木製品、トナカイ角製品などのほか、サミに関する書籍やサミの伝統音楽のCDなども販売されています。

トナカイ研究牧場は、フィンランド狩猟獣・漁撈調査機構キョウリョウに属する研究機関です。イナリ中心部から少し離れたカーマネンというところにあり、トナカイの生態や放牧地の状態、トナカイの管理などに関する調査・研究をおこなっています。

このように、イナリにはサミ文化に関係する組織・機関が集まっており、フィンランドにおけるサミ文化の中心地になっているという印象を受けました。

イナリの次には、ノルウェーのカラショクという町を訪ねました。

カラショクのサミ文化公園は、ノルウェーのサミの歴史と現状に関する映像を上映する「マジカルシアター」と野



サミ博物館（フィンランド/イナリ）

外展示施設から構成されています。

サミ文化公園に隣接するカラショク・サミ博物館は、サミの民族資料についてはノルウェー最大のコレクションを所蔵しているそうです。

サミは4カ国に分かれて暮らしていますが、カラショクには、ノルウェーのサミ議会があります。議場の設備は大きくて新しく、会議室、図書室などの設備も整っていました。

その後フィンランドに戻り、ラップランド県の中心都市ロバニエミでラップランド大学アークティック・センターとラップランド郷土博物館を訪れました。

アークティック・センターでは、フィンランドを含む北方地域の環境に関する自然科学的な展示、ラップランド郷土博物館は、ロバニエミの歴史や文化を中心とした人文科学的な展示をおこなっています。

この二つは、アークティクムという一つの建物に同居し、図書館や食堂、売店などを共用しています。

最後にヘルシンキに戻り、フィンランド国立博物館、文化博物館などを視察しました。

国立博物館は、フィンランドの歴史、文化を総合的に扱った博物館で、サミの民族文化に関する展示も含まれています。

一方、文化博物館は、世界各地の民族文化を対象としています。サミの資料はあまりありませんでしたが、アラスカ、西シベリアなど、北方民族の資料が展示されていました。

短期間でしたが、サミの文化や博物館の現状を垣間見ることができました。今後の博物館活動に活かしていきたいと考えています。

（学芸グループ 中田 篤）

第22回北方民族文化シンポジウム

北太平洋の文化： 北方地域の博物館と民族文化②

平成19年11月3日 [土]、4日 [日]

会場 オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）
網走市北2条西3丁目

「資料を活かす」をキーワードに、国内外の博物館関係者・民族文化伝承者、教員、研究者等による、博物館活動や関連機関とのネットワークにおける事例報告や討論を行います。

博物館は民族文化の保存や伝承、普及・啓発にいかにかに寄与できるのか、多様な事例をとおして考えます。

関連事業「プージャー」上映会 12月1日(土)13:30-15:30
会場 オホーツク・文化交流センター 入場無料

発表者

出利葉浩司（北海道開拓記念館）
萱野志朗

（萱野茂二風谷アイヌ資料館）

アンドレア=ラフォレ

（カナダ国立文明博物館）

文公輝（大阪人権博物館）

角達之助（当館）

バトリシア=パートナウ

（アラスカ先住民文化センター）

佐々木博司（千歳市立緑小学校）

山崎幸治（北海道大学アイヌ・

先住民研究センター）

田口洋美（東北芸術工科大学）

内田順子（国立歴史民俗博物館）

貝沢耕一

（平取アイヌ文化保存会）

<発表順>

INFORMATION

特別展示観覧者累計10万人

当館の特別展示観覧者累計が8月11日に10万人になりました。10万人目はお母様と一緒に埼玉県からいらっしゃった高田祥佳さん(写真左)でした。夏休みの自由研究にアイヌ文化研究を選ばれ、当館を訪れたとのことでした。



職員の異動

◆退職

博物館課主査(本部) 竹内道生

◆採用

博物館課主査(本部) 伊藤和宏

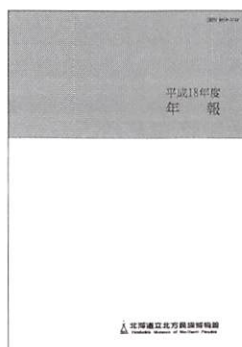
◆発令

博物館課主任

安藤芳恵 石原生久代

年報

平成18年度年報を発行しました。



発掘しました

網走市能取岬西岸遺跡（オホーツク文化）での発掘を、6月26日から7月15日までの日程で行いました。担当は角達之助学芸員でした。



出前授業

8月23日は昨年に引き中田篤学芸員、佐々木智英総括主査が、大空町立女満別小学校で出前授業を行いました。

サハリンの少数民族の文化を紹介したあと、ウイルトのやじろべえ作りを行いました。



北方民族博物館だより No.66

平成19(2007)年9月28日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
電話 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889
e-mail : tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

財団法人北方文化振興協会